

UIST2008 参加報告

大槻麻衣 (立命館大学)

ACMが主催するヒューマンインタフェース分野では著名な国際会議の一つ、UIST (ACM Symposium on User Interface Software and Technology) が10月19日から22日までアメリカ カリフォルニア州, モントレーで開催された (図1). 今年の参加者は200人程度で、昨年と同規模であったが、昨年よりも日本人の参加者・発表者が少ないように感じた。

会議のメインとなる口頭発表は全部で34件であり、うちFull paperは25件、Short paperにあたるTech Noteは9件であった。採択率はFull paperが22%、Tech Noteが14%となっていた。

Keynoteは2件あり、まず、Brigham Young 大のDan OlsenがMacintoshから現在までのインタフェースを振り返り、今後のインタラクションのあり方について述べた (図2). 次にMITのCynthia BreazealはHuman-Computer Interactionと類似する分野であるHuman-Robot Interactionについて、自身の研究内容の紹介を交えながら述べた。

今年の口頭発表は全体的に Microsoft の研究所による発表が多く 2割強を占めていた。

Best paper awardはMicrosoft のWilsonらによるテーブルトップシステム上でのアイコン操作に物理的な要素を取り入れた “Bringing Physics to the Surface” が選ばれた。Best student paper award には複数のデザイン候補を並べて表示することで GUI 設計を支援するアプリケーションを提案した Stanford 大 Hartmannらの “Design As Exploration: Creating Interface Alternatives through Parallel Authoring and Runtime Tuning” が選ばれた。そのほかの発表としては、AdobeのGoldmanらのParticle trackingを用いて動画に動的なアノテーション、リンクを付与するアプリケーションや、Toronto 大 Bae らの工業デザインのための3次元スケッチシステムなどが目を引いた。

ポスター・デモ発表では各ブースに人だか



図1 会場の Monterey Plaza Hotel



図2 Dan Olsen による Keynote



図3 Microsoft の SecondLight. テーブルに表示されている写真の上に半透明のシートをかざすと、付加情報を見ることができる。

りができ、盛んに議論が行われていた。デモの内容としてはテーブルトップ型システムやマルチタッチ入力が目立ち、中でも Microsoft のIzadiらのSecondLightというシステムが目を引いた。これはMicrosoft Surfaceの発展形として開発されているもので、テーブルの真下に設置された2台のプロジェクタのONとOFFを高速に切り替えることでテーブル面と、それより上の領域に別々の画像を投影するというものであった (図3)。

来年のUISTは2009年10月4日から7日まで、カナダのブリティッシュコロンビア州ヴィクトリアで開催される。